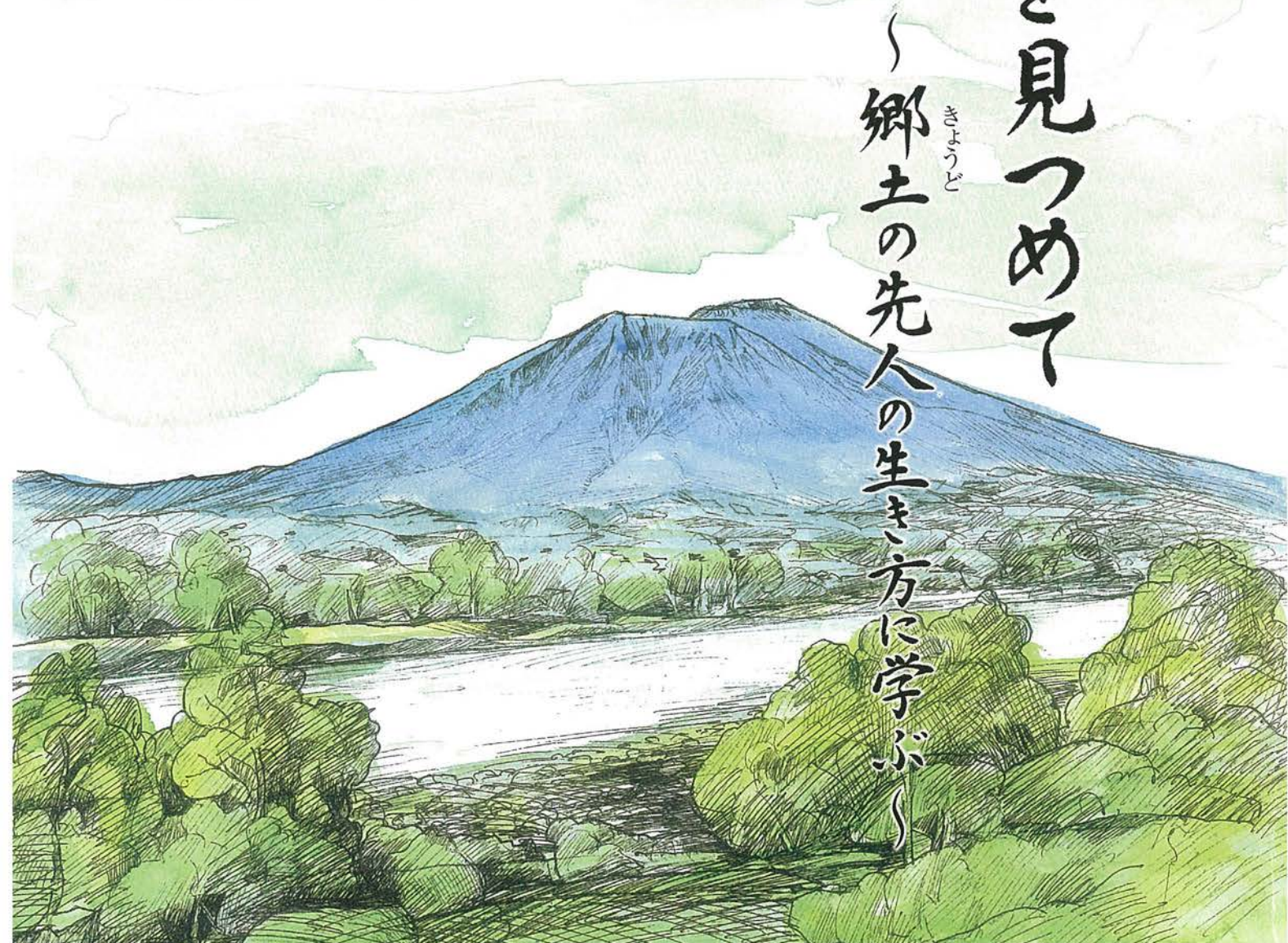


自分の生き方を見つめて

きょうど
郷土の先人の生き方に学ぶ



まえがき

みなさんは、これまでも日本や外国のすぐれた生き方をした人の伝記を読んだことがあるでしょう。「エジソン」「ヘレン・ケラー」「野口英世」などでしょうか。人間はだれもが「よりよく生きたい」という願いをもっています。その願いを実現^{じつげん}するために、そのような人たちの生き方や考え方を学ぶことがとても大切です。

この資料集「自分の生き方を見つめて」^{きょうど}郷土の先人の生き方に学ぶ」は、このような考えをもとに作成したものです。教科書や図書館にある本で知る人たちは、自分たちとはちがう世界の人たちであると思う人もいるでしょうが、この資料集では、みなさんが、今、生活している同じ岩手県出身^{しゅっしん}の人々の生き方や考え方をしようかしています。さまざまなむずかしい問題にぶつかりながらも、しんぼう強く、あるいは工夫^{くふう}をしながらそれを乗りこえていったすがたにふれることにより、今の自分とくらべながら、自分の生き方についての考えを深めてもらえればと思います。

岩手には、こんなにすばらしい生き方をした先ぱいたちがいたのだということをほこりに感じるとともに、自分の「よりよい生き方」のために、同じ岩手の先ぱいたちの生き方から、たくさんのことを学んでくれることを願っています。

平成二十三年三月

岩手県教育委員会

教育長

法 貴

敬

まえがき

- 3 -

世界から認められる学者に

木村 泰賢



写真提供：東慈寺

木村泰賢は、岩手県の滝沢村に生まれ、インド仏教哲学の研究では、「泰賢よりも優れた研究はない」と言われるほどの学者です。

おさないころの泰賢は、どんなことでもだれにも負けたくなかったため、よくけんかをしました。成績は飛びぬけてよかったのですが、あまりにも行動が乱暴であつたため、父母にはいつも心配をかけていました。とてもかわいがられて育ちました。

ところが、泰賢が十才のときに、父が病気でなくなりました。収入がなくてくらしにこまったため、泰賢は、父が勤めていた酒屋で、住みこみで働かなくてはならなくなりました。しかし、泰賢は、早起きがつらくても、つかれていても、いっしょうけんめい仕事をし、時間を見つけては、近くにある父の墓に、新しい花をそなえ続けました。

父の墓がある東慈寺の住職は、泰賢のそのようなすを見て、

「泰賢をわたしの寺によこさないか。中学校に入れて勉強をさせるから。」

と母に申し出たため、泰賢は、東慈寺で子坊さんとして働き、勉強することになりました。岩手山のふもとにある東慈寺からは、そのゆう大なすがたがよく見えしました。



泰賢^{たいけん}は、東慈寺^{とうじじ}でも、いっしょうけんめい働きました。朝はだれよりも早く起き、寺の中と庭のそうじをして、みんなの朝食をつくり、かたづけもしました。東慈寺^{とうじじ}の住職^{じゅうしよく}とすえ夫人^{ふじん}は、そんな泰賢^{たいけん}を、自分の子どものようにかわいがりました。

十三才のときに、盛岡の中学校へ進学しましたが、しばらくたつたころ、泰賢^{たいけん}は思い切つて、住職^{じゅうしよく}にお願いをしました。

「わたしは、学者^{がくしや}になるために、もっと勉強^{べんきやう}がしたいのです。

どうか、東京^{とうきやう}の中学校で勉強^{べんきやう}をさせてもらえませんか。」

「お前は、寺^じの住職^{じゅうしよく}では満足しないだろうから、東京^{とうきやう}に行つて勉強^{べんきやう}をなさい。」

そう言つて、住職^{じゅうしよく}は、泰賢^{たいけん}の願いをこころよく聞き入れてくれました。

ところが、東京での生活が始まつた翌年^{よくとし}、住職^{じゅうしよく}がなくなつてしまいました。住職^{じゅうしよく}夫^ふ妻^{さい}には子どもがいませんでしたので、泰賢^{たいけん}はなやみました。

「後^ごをついで、寺^じの住職^{じゅうしよく}にならなくてはいけない。東慈寺^{とうじじ}にもどろうか。でも、このまま勉強^{べんきやう}を続けたい。」

泰賢^{たいけん}が深くなやみ続けているとき、そのすがたを見たすえ夫人は、

「自分の目標に向かい、東京での勉強を続けなさい。」と泰賢^{たいけん}をはげしました。その一言^{ひとこと}を聞いて、泰賢^{たいけん}は、

「このまま勉強を続けて、世界から認められる、りっぱな学者になろう。」

と固く心に決めたのです。

中学校卒業後は、大学に進み、学費のために塾^{じゅく}で英語を教えながら、自分も英語の勉強にはげみました。

大学での成績^{せいせき}がとても優^{すぐ}れていたため、さらに、東京帝国大学^{※とうきょうていこくたいがく}へ進学して勉強を続けました。そのと中で、外国との戦[※]そうが始まり、外国の病院で働かなければならなくなったときでも、泰賢^{たいけん}は、学問をわすれませんでした。病氣やけがで苦しむ人たちの世話^{せわ}という、とてもつらい仕事をしながらも、いつも二さつのドイツ語の本と辞書を持ち歩きました。そして、少しの時間を見つけては勉強を続け、ついには、ドイツ語も覚えてしまったのです。

大学を卒業した後も、泰賢^{たいけん}はそのまま大学に残り、研究に打ちこみました。昔のイン





ドの文字で書かれた資料を、何度も何度も読み返して徹底的に調べ、インドの歴史や仏教の考え方をわかりやすくまとめていきました。

その研究が認められ、四十二才になったとき、東京帝国大学の教授となりました。ついに泰賢は、世界から認められる、りっぱな学者になったのです。

泰賢がなくなってから、九十年以上がたった今でも、泰賢の研究は、世界中の人に語りつがれています。そして、泰賢は今、子どもをすごした東慈寺でねむっています。東慈寺から見える岩手山のゆう大なすがたは、そのころのままです。

※インド仏教哲学・・・インドに始まった仏教の考え方をまとめた学問

※住職・・・お寺の責任者の和尚

※子坊・・・お寺の見習いの和尚

※東京の中学校・・・旧制中学校のことであり、現在の高等学校

※東京帝国大学・・・現在の東京大学

※戦そう・・・日本とロシアの間で起きた日露戦争（一九〇四～一九〇五）

本の虫

野^の村^{むら}胡^こ堂^{どう}



「長一^{おさかず}、長一はどこに行った？」

「長一^{おさかず}なら、また土蔵^{どぞう}だろう。」

母^{はは}が、父の言うとおりに、土蔵^{どぞう}をのぞいてみると、男の子が本の山の中にすわって読書に熱中^{ねつちゅう}していました。

「長一^{おさかず}、ごはんだよ。早くおいで。」

「うん、今いいところだから……。ちょっと待って。」

母は、「またか」と思いながらも、読書に夢中^{むちゅう}になっている息子^{むすこ}を温^{あた}かく見守^{まも}っていました。この長一^{おさかず}が、後^{のち}に「銭形平次^{せんがたへいじ}」を世^よに送り出した野村胡堂^{のむらこどう}その人なのです。

野村胡堂^{のむらこどう}は、明治十五年に、彦部村^{ひこべむら}（現在の紫波町^{しんわちやう}）で生まれました。

父は、日ごろからたくさんの本を買^かいもとめていて、それらの本が、土蔵^{どぞう}にぎっしりとおさまられていました。小さいころから、無口でおとなしかった胡堂^{こどう}は、友だちと遊ぶよりも、一人で土蔵^{どぞう}にこもり、本を読むことを楽しみにしていました。胡堂^{こどう}にとって、家の土蔵^{どぞう}は、大好きな本がねむる宝^{たから}の山でした。

そのころは、テレビもラジオもない時代です。胡堂は、彦部村では見ることも聞くこともできないような日本の昔話や外国の物語の世界にあこがれ、すっかりそのおもしろさにとりつかれてしまいました。

胡堂に物語のおもしろさを教えてくれたのは、読書だけではありません。胡堂の家は、村の庄屋のような家でしたので、いつもたくさんのおとなの大人が出入りしていました。その大人たちの中で、胡堂が大好きだったのは、たみ屋の親方でした。

「おじさん、今日もお話を聞かせて。」

「よしきた、今日はな、彦部のむかしの話だぞ。」

夜、ねる前になると、胡堂は、毎日のように親方にお話をせがみます。親方は、とても物知りで、次から次へと彦部の昔話を話してくれました。胡堂は、ねむいのもわすれて、目をかがやかせながら親方の話に聞き入りました。

こうして、胡堂は、土蔵の中の読書と親方の語ってくれる昔話から、物語のおもしろさに、どっぷりとつかっていったのです。



胡堂こどうは九才になり、高等こうとう小学校に入学しました。おとなしくて無口むぐちな胡堂こどうは、何人かのいじめっ子にしょっちゅういじめられ、泣かされました。

「ぼくは、友だちと話すことが苦手にがてだし、とくいなこともない。だから、みんなにいじめられるのかなあ。」
ところが、ある日のことです。いつもは無口むぐちな胡堂こどうが、ひよんなことから、これまでに読んだ本の中身をいじめっ子たちに話したときのことです。

「その先を聞かせてよ。」

胡堂こどうは、物語の続きを話しました。小さいころから読書好きだった胡堂こどうの口からは、物語がすらすらと出てきます。時に大きな声で、時に小さな声で、冒険ぼうけん物語を話して聞かせました。いじめっ子たちは、胡堂こどうの話す物語の世界にすっかり引きこまれてしまいました。

「じゃあ、今日きょうはここまで。続きは明日あす。」

いじめっ子たちは、ため息をつきました。

「明日あすも話の続きを聞かせてよ。」



「いいとも。こんな話なら、三年でも五年でも話せるくらい、話のタネはあるぞ。」

胡堂は、いじめっ子たちを前にして、初めておねをはりました。

その日から、いじめられっ子だった胡堂のまわりには、たくさんのお友だちが集まり、話をねだるようになりました。どの子も、胡堂の話に夢中になって聞き入りました。来る日も来る日も、たくさんのお友だちにかこまれながら、胡堂は物語を語りました。その顔は、喜びと自信にあふれていました。

その後、胡堂は、子どものころの読書で身につけた文学の才能を生かし、作家となつて、たくさんのお本を書きました。中でも、「銭形平次」は、テレビや映画でも放映され、大人気となりました。

胡堂は、晩年、自分にこのような才能を育んでくれたふるさと紫波町のために、たくさんのお金と多くの本やレコードを寄付しています。

※土蔵……土のかべで作られた倉庫のような建物。

※庄屋……村の代表である役人のような家。

※親方……店の代表の人。

※高等小学校……今の中学校のようなもの。その当時、小学校は四年間だった。

みちのくの電信王

谷村貞治



「・―」「―・―」「・―・―」。実は、これで「イ」「ワ」「テ」と読みます。これらは、「モールス符号ふごう」といい、文章を「・(ピツ)」という短い音と、「―(ピー)」という長い音の組み合わせで表した信号で送り、受け手が、それを耳で聞き取り文章に直すという電気通信(電信)の方法です。七、八十年ほど前まで使われていた方法ですが、使いこなせる人の数は、とても少ないものでした。今の「メール」などのように、だれでも簡単に文章を作ったり送ったりすることなど、夢ゆめのような時代でした。

しかし、岩手には、そんな「夢ゆめ」を現実のものにしようと、新しい機械の開発に力をそそぎ、後に「みちのくの電信王」とよばれるようになった人物がいました。岩手県の新堀村にいぼり(今の花巻市石鳥谷町はなまき いしどりや)で生まれ育った谷村貞治やむらていじその人です。

十八才のころ、東京に出た貞治ていじは、「電信」をあつかう役所で働き始めました。それから一年ほどたったある日のことです。貞治ていじは、電信柱のてっぺんで、電線の修理しゅうりをしていました。頭上には真っ青まおな空が広がっています。そこにプロペラとエンジン

の音をとどろかせながら一機の飛行機が飛んできました。

このころ飛行機は、まだまだめずらしいものでした。

「すごいものが発明されたもんだ。」

飛行機をながめながら、貞治は、自分でもおどろくほどのむねの高鳴りを感じ始めていました。

「よし。おれもこの電信の仕事で、人をおどろかすようなものを必ず作ってやるぞ。」

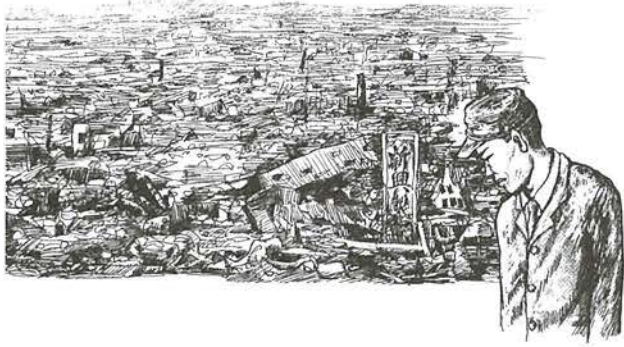
電線の修理もすっかり忘れ、小さくなっていく飛行機を見つめる貞治のむねの中には、いつの間にかそんな決心が固まっていきました。

その後、貞治は、役所の仕事を続けながら、電気学校に入学し、電信開発に必要な知識をどんどん身につけ、開発への夢をふくらませていきました。

そんなおり、貞治の運命を左右する大変なできごとが起こりました。死者・行方不明者およそ十万人とも言われる関東大震災です。東京一帯は、だれもが明日への希望を失ってしまうようなひどい有り様でした。貞治も、地震が原因で発生した火災によって、住んでいた家など何もかも失ってしまいました。

ところがです。貞治は、希望を失うどころか、この大震災をきっかけに新しい会社にな





つり、ずっと思い続けていた電信開発の夢に向かつて新たな一步をふみ出したのです。そこから、貞治の研究の日々が始まりしました。そして、十年近くにおよぶ研究の末、日本で初めてとなる「仮名文字電信機」を作ることになったのです。それまでは、たった一つの言葉を送るために、何種類ものモールス符号を打たなければならなかったのですが、この機械は、仮名文字のついたキーをおすだけで、自動的にモールス符号が送受信されるといふ、とても便利なものでした。

貞治は、東京の蒲田というところに自分の工場を建て、その後も、順調に仕事を進めていきました。

しかし、さらに大きな苦労が貞治を待ち受けていました。太平洋戦争です。東京も大空襲にあい、百万人以上の人が被害を受けました。大震災の苦労にも負けず、長い年月をかけて大きくしてきた貞治の工場も、一瞬にして灰になってしまいました。残されたのは、たった一枚のかん板と、それをかかっていた門の柱だけでした。

「あんなにがんばってきたのに――。今回ばかりは、もう何もかもおしまいだ。」

大事に守ってきた工場を失い、これからの夢さえも見失ってしまった

た貞治は、仕事をやめる決心をしてふるさとの花巻にもどりました。

それからどれくらいたったでしょう。ある日、貞治のもとに、国から意外な知らせがとどきました。それは、「戦争でこわされた全国の電信施設の機械を新しくしてほしい」という内容でした。これまでたくさんさんの苦勞を乗りこえ、努力を積み重ねてつくり上げてきた貞治の技術が国にも認められたのです。

新たな決意を固めた貞治は、花巻に工場をかまえ、以前にもまして、意欲的に仕事に取り組んでいきました。そして、施設の機械を新しくしたただけではなく、世界初となる、日本語も英語も打てる「テレタイプ電信機」や、現在の日本語ワープロ（ワードプロセッサ）の前身とも言われている「漢字テレプリンター」など、世の中の人々をおどらせるような機械も次々と開発していったのです。

こうして貞治は、その一生を電信にささげました。

いくつもの困難を乗り越えてきた貞治。そんな貞治の心を支え続けてきたものは、ずっと昔、電信柱の上で見た真っ青な空を飛ぶ飛行機のすがたと、その時に思いえがいた大きな大きな「夢」だったにちがいありません。



学問は人々の幸せのために

芦^{あし}

東^{とう}山^{ざん}



現在^{げんざい}の一^{いち}関^{せき}市^し大^{だい}東^{とう}町^{ちやう}渋^{しぶ}民^{たみ}に生まれた^{あし}芦^{とう}東^{ざん}山^は、おさないころから勉強好きでした。その当時は、「士^し農^{のう}工^{こう}商^{しよう}」というきびしい身^み分^{ぶん}制度^{せいど}があり、身^み分^{ぶん}のちがいによって差別^{さべつ}を受け、人々は苦しい生活を送っていました。

大きくなった東^{とう}山^{ざん}は、仙^{せん}台^{だい}藩^{はん}で学者として働くことになり、ある時、殿^{どの}様^{さま}のおともで江^え戸^どに行くことになりました。そこで東^{とう}山^{ざん}は、室^{むろ}鳩^{きゆう}巢^{そう}先生^{せんせい}という有名な先生から学ぶことができました。先生は、東^{とう}山^{ざん}の才^{さい}能^{のう}を認^みめ、ある日、こう言いました。

「犯^{おか}した罪^{ざい}によって刑^{けい}ばつを決めるのが裁^{さい}判^{はん}であるはずなのに、今の裁^{さい}判^{はん}は、身^み分^{ぶん}のちがいによって刑^{けい}ばつが左右されている。このおかしい裁^{さい}判^{はん}のやり方を正しいものにするために、刑^{けい}法^{ぽう}の本を書きたいと思っっているのだが、わたしも少々年をとりすぎた。わたしの代わりに、この仕事をやってくれないか。お前なら必ずできるはずだ。」

「わかりました。自分にどれだけのことができるかわかりませんが、いつか先生の願いにかなうような本を書けるよう、学問にはげみます。」

このとき東山は、尊敬する先生からたのまれたこの仕事を、しっかりと心にきざみました。

江戸で多くのことを学んだ東山は、学問の必要性について考えるようになりました。

「世の中は、どんどん進んでいる。仙台藩にも、まずしい人でも勉強できる学校が絶対に必要だ。」

そう考えた東山は、藩に意見書を出しました。

しかし、藩が建てたのは、身分の高いお金持ちの人たちしか学べない学校でした。そこで勉強する学生や先生の席は、親の身分の順番で決められていました。

「親の身分で差別するなんておかしいじゃないか。どんな人でも学べる学校を建てるべきだし、席順だって、身分の順ではなく、年れいの順にすべきだ。」

そんな東山の意見は、仙台藩には受け入れられませんでしたが、それどころか、とんでもない考えの持ち主だということ、他人の家にあずけられ、そこから一步も外へ出てはいけないという刑を言いわたされました。

東山は、学者としての仕事も思うようにできず、つらい日々が続きました。しかし、





東山は、藩に意見書を出したことを、少しも後かいしていませんでした。

不自由な生活の中で、東山は、昔、先生からお願いされた仕事を思い出しました。

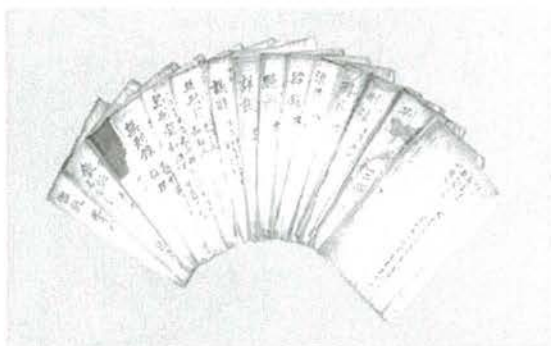
「そうだ。今こそ、先生にたのまれた仕事に取り組もう。新しい刑法の本をまとめあげなければ。」

東山の頭の中には、自分に思いをたくした先生の顔がうかんできました。東山は気持ちをふるい立たせ、刑法についての本を書くことを決意しました。

原こうを書き始めて十七年、東山六十才のとき、十八巻にまとめた刑法の本、『無刑録』がとうとう完成しました。この本には、次のようなことが書かれています。

○罪を犯してしまった人にもわけがあるはずだから、そのわけをよく調べなくてはならない。

○裁判で大切なことは、裁判をする人が公平な心で、真実をよくたしかめ、すじ道を立てて判断することである。



東山が書いた『原本無刑録』（岩手県指定文化財）
（芦東山記念館蔵）

『無刑録』は、東山の死後、その考え方のすばらしさが認められ、日本だけでなく、外国の法律関係者などにも広く読まれています。

東山が六十六才のとき、藩からゆるされ、二十三年間続いた不自由な生活が終わりました。生まれ育った浪民に帰った東山は、身分のちがいに関係なく、学問を学ぼうとする多くのの人々と親しく交わりました。

東山がなくなったとき、多くの人々が東山の死をおしみました。東山は、愛するふるさとと浪民を見わたせる高台の墓地にねむっています。



※士農工商・・・江戸時代の身分制度。武士・農民・職人・商人をいう。最も上の身分とさ

れた武士が権力をにぎり、それぞれの身分の中でも、家がらによって細かく分けられていた。

※仙台藩・・・現在の宮城県仙台市に中心をおいた藩。

※刑ばつ・・・罪を犯した者に対するばつ。

※刑法・・・犯罪とそれに対する刑ばつについて定めた法律。

沖^{おき}へのちよう戦

大越^{おおこし}
作右衛門^{さくえもん}



親潮^{おやしほ}と黒潮^{くろしほ}がぶつかり合う三陸沖^{さんりくおき}は、世界有数の漁場^{ゆうじやう}です。サケやサンマ、イワシなど、季節によって多くの魚がむれをつくって、三陸沖^{さんりくおき}にやってきます。

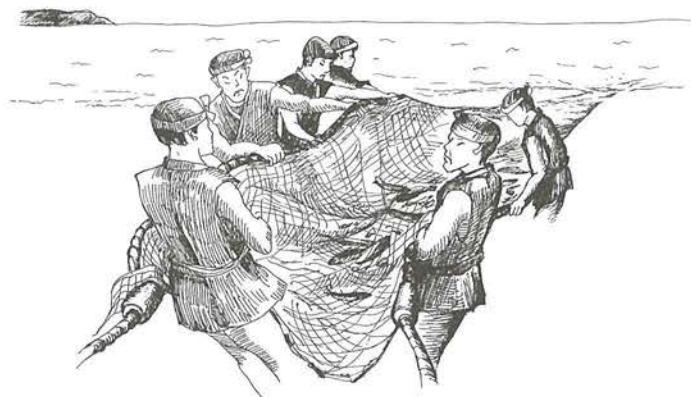
「この魚を少しでも多くとりたい。」

それは、三陸^{さんりく}に住む漁師^{りやうし}たちにとって、昔も今も変わらない共通の願いです。

この三陸宮古^{さんりくみやこ}に、代々続く網元^{あみもと}の家に生まれた大越作右衛門^{おおこしさくえもん}は、若いころから漁法^{ぎよほう}の研究に大変熱心^{ねつしん}な人でした。

作右衛門^{さくえもん}は、これまで父たちが行ってきた地曳網^{じびきあみ}のような漁法^{ぎよほう}では、岸によってくる魚しかとれないことを、とても残念に思っていました。

「このままでは、どの家も毎日食べていくのがやっただ。これからは、沖^{おき}の魚をとれるようになんねえば……。」
作右衛門^{さくえもん}は、新たな漁法^{ぎよほう}の開発を、真けんに考えるようになっていったのです。

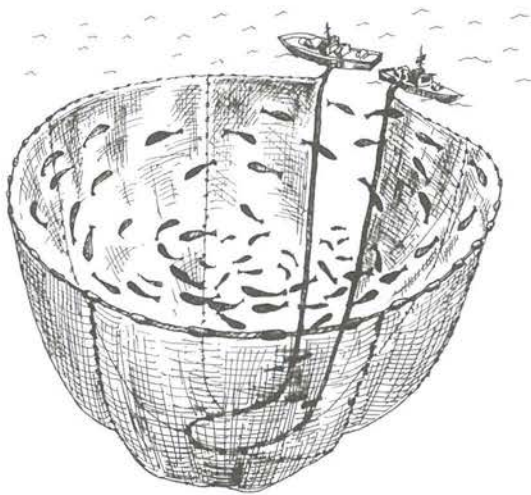


そこで、作右衛門は、まず潮の流れを観察しました。さらに、魚のむれの通り道や、その通り道のうつり変わりを調べ、それにあった新しい漁法を試してみました。しかし、このちよう戦は失敗の連続でした。次々とかぶアイデアをもとに試してみるのが、魚はいつこうにとれません。それでも、作右衛門は、各地の経験ゆたかな漁師から話を聞くなど、新しい漁法の研究に、さらに熱心に取り組むようになっていきました。

こうして、九年の月日が流れた明治二十一年の春、作右衛門は、ぐう然、ある本の中に、自分の運命を決める記事を見しました。それは、「アメリカ式巾着網」のかい説でした。巾着のような大きなふくろ状の網を使って、魚のむれをいっきにとらえてしまうものです。

「これだ。」

作右衛門は、すぐに網作りに取りかかりました。そして、その年の六月にはニシン巾着網を作り、それから、季節ごとにやってくる魚のむれに合わせて、何度も巾着網を作りました。しかし、魚は思ったようにとれませんでした。



「魚がみんな、網から逃げてしまってる。」

「これなら、前の網の方がいいんでねえの。」

漁師たちの文句が、作右衛門の耳にも聞こえてきます。

「やっぱり無理なんだべか……。」

そのころ、作右衛門には、心配なことがもう一つありました。それは、網を作るお金のことです。何年もかけて、新しい漁法の研究に取り組んできた結果、大越家の財産はそこをつきそうになっていたのです。

作右衛門は、その翌年、道具も船も新しくした上で、サケ巾着網を作ることを決意します。この網は、今まで以上に工夫を重ねたものでしたが、こまったことに船に乗ってくれる漁師がいません。

「あんなバカ網で、魚がとれるわけねえべ。」

これまでの失敗で、漁師たちは、作右衛門の作る網を笑いとばし、相手にしなくなっていたのです。

作右衛門は、しかたなく近くの農家の人たちを集め、漁を続けました。道具の使い方もままならない人たちによる苦しい漁でしたが、ついにその苦労が実を結びます。明治二十三年のサケ漁において、このあたりでは最も多くのサケをとることができたのです。

網あみの中でにげ場を失い、バチャバチャと水しぶきをあげるたくさんの方さんのサケたち。それを見つめる作右衛門さくえもんのほほに、ひとすじ光るものが流れました。

巾着網きんちやくあみが、すばらしい結果を出すようになると、作右衛門さくえもんのところに、県内はもとより、県外からも、使い方を教えてほしいと言う人たちが、たくさん来るようになりました。作右衛門さくえもんは、そうした人たちに、巾着網きんちやくあみの全てをあますところなく教えました。

そして、しばらくすると、巾着網きんちやくあみを使う船ふねが、大漁旗おたいりようきをなびかせて港に帰ってくる光景こうけいを、全国各地で見かけるようになりました。

巾着網きんちやくあみについて、特許とくしよをとるようにすすめられた作右衛門さくえもんは、こう言いってことわったそうです。

「おらあ、そんなものはいらねえ。魚はみんなでとればいい。」

※網元あみもと……船や網などを持っていて、多くの漁師りしやうしをやとって漁業ぎよぎやうを営いむ者。

※大漁旗たいりようき……漁船ぎよせんが港に帰るとき、大漁たいりようであったことを知らせる旗はた。

※特許とくしよ……新しい発明や改良かいりようをした物を、商品として売うるような時に、政府が、その発

明や改良かいりようをした人にだけ、それを作る権利けんりを認みめること。



学びとったもぐりの技わざ

磯崎定吉いそざき ぎきち



後に「南部もぐりの開祖※かいそ」と言われた磯崎定吉いそざき ぎきちは、明治五年に岩手県の種市たねいち（現在の洋野町ひろの）に生まれました。種市のあたりは、夏でも冷たい風がふくため、米づくりにはむかず、まずしい生活の家が多いところでした。定吉ぎきちの両親は、彼が小さいころになくなったので、定吉は、一家のくらしを支えるために、一生けん命働きました。

定吉ぎきちが二十七才のときのことです。名護屋丸なごやまるという船が、種市沖たねいち おきで遭難※そうなんしました。その船の解体作業※かいたい さぎようをするために、千葉県から、三村小太郎みむらこたろうという潜水夫※せんすい ぶがやってきました。

三村は、解体作業を手伝っていた定吉を見て、

「おまえには、素質そしつがある。おれに弟子入りして、潜水技術せんすい ぎじゆつを習ってみないか。」

と誘※そいました。この技術を覚えるためには、二、三年はかかると言われていました。家族のくらしを支えなければならぬ定吉は、初めはことわりしましたが、

「まてよ、この技術ぎじゆつを覚えると、長い時間もぐれて、いろいろな仕事ができるかもしれない。」

と思い、名護屋丸の解体作業かいたい さぎようをしている三か月間だけ、三村に弟子入りをすることにし

ました。

しかし、その技術ぎじゆつを覚えるのは、かんたんなことではありませんでした。三村が教えたのは、「ヘルメット式潜水技術せんすいぎじゆつ」といい、ヘルメットや潜水せんすいぐつなど、六十キロ以上もあるものを身につけてもぐります。水中での移動いどうは、潜水服せんすいふくの中の空気を調節ちようせつして行いますが、それをまちがえると、水面までうきあがったり、海底までしずみこんだりしてしまいます。その上、海中では水の重さがかかり、陸上のように自由に体を動かすことができません。体の向きを変えることもむずかしく、物を持ちあげるなどの作業さぎようにいたっては、しせいをたまちながら行うのでさらに大変でした。そのため、一度もぐっただけで、へとへとになり、

「何てむずかしいんだ。おれに覚えることができるだろうか……。」

と思うこともたびたびでした。しかし、定吉さだきちは、

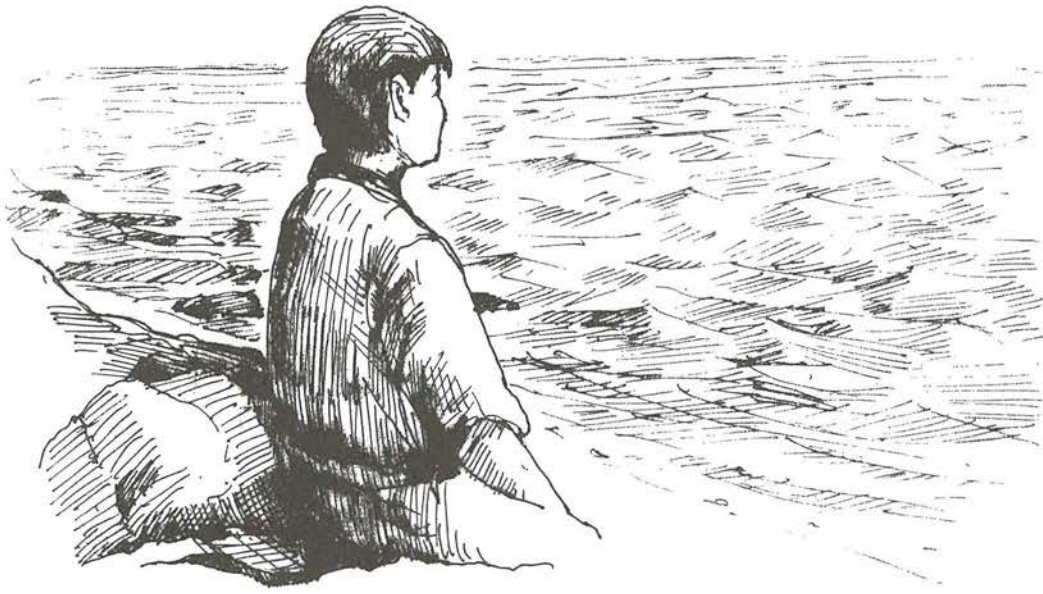
「この技術ぎじゆつを学びとれば、沈没船ちんぼつせんの解体作業かいたいさぎようなどの仕事ができるようになる。そして、

この仕事を広めれば、種市たねいちの人々のくらしが少しでもよくなるはずだ。」

と考えたのでした。

定吉さだきちにあたえられた時間は、三か月しかありません。さらに心を強くした定吉さだきちは、まわりの潜水夫せんすいふたちの動きを見て必死ひっしに覚えしました。三村みむらからのきびしい特訓とくくんにもたえ、とうとう三か月のうちに、潜水技術せんすいぎじゆつの基本を身につけたのです。

三村^{みむら}たちが帰^{かえ}ってからも、定吉^{さだきち}はさらに技術^{ぎじゆつ}をみがき、ついには、日本一と言^{いわ}われていた千葉県^{千葉県}の潜水夫^{せんすいふ}にも負^{まか}けないうで前^{まへ}になりました。



ところが、当時^{とうじ}は年間を通して船^{かふね}の解体^{かいたい}の仕事^{しごと}があるわけではなく、定吉^{さだきち}の家のくらしも苦^{くる}しくなっ
ていききました。定吉^{さだきち}は、せっかくここまで努力^{どりよく}して
潜水技術^{せんすいぎじゆつ}を身につけたのに、

「このままでは、くらしていけなくなる。やめて
しまおうか。」

と思うようになりました。

そんなある日、定吉^{さだきち}は、ぼんやり海^{うみ}をながめてい
ました。浜^{はま}では、地元^{じもと}の人^{ひと}たちがアワビとりをして
いました。船^{ふね}の上^{うへ}からもぐってはとり、息^{いき}つぎのた
めに海面^{かいめん}に上がり、またもぐっていきます。

「そうだ。これだ。」

定吉^{さだきち}は、さけびました。潜水技術^{せんすいぎじゆつ}が生^はかせる漁^{ぎよう}
業^{ぎよう}に目^めをつけたのです。潜水漁業^{せんすいぎよう}は、これまで行^{おこな}わ

れていた「すもぐり」とちがい、一度に長い時間もぐれるので、ウニやアワビなどをたくさんとることができました。

その後、定吉は、多くの弟子を育て、その技術を種市の人々に伝えました。こうして定吉のはじめた潜水漁業は、種市の人々のくらしに大きなえいきょうをあたえたのでした。

定吉が亡くなった後、その思いは、現在、岩手県立種市高等学校「海洋開発科」に受けつがれ、卒業生たちは、国内のほか海外でも活やくしています。種市の潜水士たちは「南部もぐり」と言われ、その潜水技術の高さは、今も国内外で認められているのです。

※開祖……一つの流派をおこした人

※遭難……海や山で災難にあうこと

※解体……ばらばらにすること

※潜水夫……水中にもぐって作業をする人



この資料の編集にあたった先生方（順不同）

◇道徳副読本作成委員

長 島 香乃子（八幡平市教育委員会 指導主事）
菊 池 一 章（中部教育事務所 指導主事）
内 川 千亜希（県南教育事務所 指導主事）
福 徳 潤（宮古教育事務所 指導主事）
向折戸 博 昭（普代村教育委員会 指導主事）
堀 切 茂 行（県立総合教育センター 研修指導主事）

◇道徳副読本協力委員

伊 藤 一 彦（岩手大学教育学部附属総合教育実践センター 客員教授）
佐々木 保 子（盛岡市教育委員会 教育相談員）
加 藤 孔 子（釜石市立釜石小学校 校長）

◇表紙、本文中イラスト

齊 藤 眞理子（盛岡市立黒石野小学校 副校長）

◇題 字

藤 岡 宏 章（岩手県教育委員会事務局学校教育室 主任指導主事）

◇事務局

多 田 英 史（岩手県教育委員会事務局学校教育室 首席指導主事兼義務教育課長）
須 藤 孝（岩手県教育委員会事務局学校教育室 主任指導主事）
飯 岡 竜太郎（岩手県教育委員会事務局学校教育室 指導主事）
水 城 久美子（岩手県教育委員会事務局学校教育室 主事）